

「居場所」概念の検討

- 大学生を対象とした調査を手がかりに -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
仲野 沙也加

「居場所」は様々な分野で注目されている。しかし、どのような実践が「居場所」に結びつき、適応的な効果に結びつくのかといったことは未だ手探りの状態である。「居場所」を選択することに困難を感じない人たちは、どのような要因を意識しながら「居場所」を定めているのか。この問いに目を向けることは、「居場所」の選択に困難を感じる人への生活環境の計画にあたって、一定のヒントになる。こうした動向を踏まえ、本論文では「居場所」の実証的な検討を行った。目的としては以下の三点を掲げた。「居場所」の分類、

「居場所」の規定要因、「居場所」への意識とその違いである。方法としては「居場所」の先行研究を概観し、大学生 23 名に質問紙調査、インタビュー調査を行った。

本論文は研究 1 と研究 2 から成る。研究 1 では、数量的な分析及び KJ 法を用いた内容分析を行った。得られた結果から、多くの人々が「居場所」を意識して生活しており、その中で、「安心」「居心地のいい」空間や関係性を「居場所」として最も用いていることが明らかとなった。一方で、「居場所」は「場所」に関しても「人」に関しても「ポジティブな要素」だけでなく、「ネガティブな要素」もあることが示された。また、「居場所」のもつ機能は、「人」と「場所」で異なる面がみられた。「人」に対しては、「安心できる」「居心地が良い」に加えて、「自分の持っている意識や価値観を共有できる関係性」を大切にしていた。「場所」に対しては「自主的な参加」や「所属意識」、「向上心」、「楽しいと感じること」を重視していると示唆された。

研究 2 では「居場所」を意識していない 2 名を抜粋し、内容分析を行った。その結果、日常的に「居場所」を意識していなくても、「家族」、「友人」、「図書館」などを「特別な場所・関係性」と考え、「居場所」と意識している人と同様に何らかの心理的な影響を得ていることが考えられた。また、「大人数で関わる時間・場所」よりも「今は 1 人でやらなければいけないことがある」から、「居場所」と言われているような「関係性」より、「1 人で居る時間」を好んで選択していることが示唆された。

本調査の結果より得られた見解から、不適応問題に対しての介入について、三つの観点から述べた。一つめは、支援者は参加者にとっての「安全空間」を提供することを念頭に置くことである。二つめは、「安全基地」の役割をベースに本人の「自主性」を引き出すような対応を周りがしていくという視点の返還が必要であることである。三つめは、旅立つ場としての「居場所」の機能を生かすことである。今後の課題としては、以下の四点が挙げられた。「居場所」の規定要因の検討、 研究対象者、「特別な居場所」の研究、

本来的な「居場所論」についてである。このような点を踏まえて、さらなる研究の蓄積が必要であると考えられる。